

3、全廿五年一月十九日 会長公へ御差図
さあへへだんへとりしまるへ きくも一ツの里 わ
かるも一ツの里 たれにとをとをゆうややない はやくさとれよ
へ 日々の里に一粒万倍の里をさとしをこふ 是迄むつかしか
つた」(35オ)

これてよいとおへば、はづれる ふわへとした事であつた ころりとたてかへすれハ生涯おさまる ぜんへの事をゆうやない
さきへの里をさとすから あとへの事情をしかりきいて
おけ さきへにしらすとゆうハ親とゆう里をもつてしらす め
んへそれへよくよくの事情をさためよ はんじ日々の処おも
うたようにいかせん ゆうた」(35ウ)

ようにもいかせん 事情きいて事情日々 あれさへきけば日々に
ます 日々にあたへる これをとふすから みなそろふて たか
いへの里八十きかさにや かずへの里八とんとうけとれん
つゝしみの道や つゝしみが世界第一一ツの里 つゝしミか
おゝかんやほとに これ一ツさとしておこふ」(36オ)

この日付の「おさしづ」はなく、調べてみると、明治25年1月14日夜の「前々よりのおさしづの件、中山会長へ運びし後にて願」に相当するものである。

正文と対照するとき、脱落した文節も1、2あり、また濁点のないものも多い。そうした点で、その意味を取る場合、若干の異同が考えられる。たとえば、「たかいへの里八十きかさにや」というところは、「高いへの里(さと)」という漢字を当てはめて考えることもできる。すると、その意味は、かなり違ったものとなろう。しかし、この「おさしづ」の写しを順次みていけば、里を〈さと〉と読むことは、まずないものとみてよい。〈十〉も当て字である。〈たかい〉は、みなそろふて〈皆揃うて〉という言葉に続くものであることから、〈互い〉として、互いへの理は重々聞かさにや、というように考えるべきであろう。

重ねて指摘しておきたいことは、この写しは、おぢばに保管されていた原本を参照したものではない、ということである。こうした「おさしづ」の写しは、いろいろなルートを経て、また、いくつかの形で伝わっていることに注意を及ぼしておきたい。そうした点に留意をして、この写しを見るのが大切であろう。あくまで、地方にどのような形で伝播しているかを、みていく資料の一つとして翻刻紹介しているのである。

4、明治廿五年四月廿八日 夜十二時刻限御咄し

さあへへかわつたるやでへ かわつたるやてへ どゆふ
事とをもふ 事情へ

日々の事情 さあへおもいへの心 なる事情 とふゆう事も
はなしかけるへ あらへこのよふなるとはわからなんだへ
すうきりわからなんだ 一寸見糸かけたる事わからん 十分き
いたへ道」(36ウ)

わからん とをゆう物て 年かかわれハ道かかわる 年々あつ
かいへ いつへまでもおもいだし ぜびへの里をなにとる
事と さらへもたす 十分の道 心一ツの道 いくへ一ツの事
なんたるわかつて一ツの里 だんへの里であるふ 十の里

である どののものである あれへあふなき道もしらず 世上一ツの道 なんほいふてきかしても きかんへの道があるふなん」(37オ)

ぼでも道があるふ 里かとへばへ里がある はやくとりかへはやくいれかへある あんな事いふている 一ツにわ通りて あんな事云ふている 一ツには段く 一ツには里をへらし なにほとつくし 一ツに一度 なに程よいかげんの里 いかなる里も道わからん 日々通りにくい 一寸これとをれハしやん こすにこせん道がある なんの事ともわかるうまい よふ見わけ めん」(37ウ)

へでしやする事ハぜびがない 日々の事上の里かをとる 道いくへ道もあるふ あちらへすらり こちらへすらり めんへそれへあふなき ほんになるほど 一ツの心ろと云ふ

この「おさしづ」の割書は「明治二十五年四月二十八日 夜十二時十五分 本席齒の御障りより伺」である。この写しは、正文との相違、脱落が2、3よりもはるかに目立つ。文節がいくつも抜けている。

このことは、次のような推測が可能であろうか。「おさしづ」のお言葉は、書き取りが許された特定の人(書取)によって筆記される。書取はふつう3人であるが、当時は墨筆筆記であるので、お言葉に、筆記漏れがないともいえない。そこで、それを互いに突きあわせて検討し、清書する。それが書下げ(おさしづ)となる。こうしたことを考慮すれば、書下げとされる以前の、お言葉を筆記したものが残る。そうしたものは書下げとはいえない。もちろん「おさしづ」ではない。ところが、何らかの理由によって、それらが人の手にわたることもあっただろう。事実、文書調査に出かけた折りに、本部書下げの紙にお言葉が記されたものであるが、「書下げのおさしづ」とはいえないものに何度か出会っている。すなわち、宇野晴義『天理教資料研究』において、「書下げをつとめたりつぎ人衆の後継者の家を尋ねて初代の直筆を種々見るうちに、身上・事情願い出の願人にいただいた書下げと同筆であり、同じおさしづを発見することがある。しかし、後継者の家に保存されたものは、大部分半端でお言葉が足りない。早書きであつて、内容がもれ落ちしたり、年月日なし。」(35頁)と記されていることが、この4の「おさしづ」の元に、こうした消息を考えることができる。

なお、明らかに写し間違いと思われる箇所も散見する。たとえば、冒頭の「かわつたるやで」の「る」であるが、これは明らかに「る」と記されているが、正文と対照すると、そこは「事」となっている。変体仮名では、「事」は「る」形から最後のところの筆運びが、下へと突き抜ける。おそらく、それを読み違えて「事」を「る」と読み下したものであろう。あるいは、この筆写した元の本が、そうであつたのかもしれない。その意味で、筆者である吉岡辰蔵の写し間違いだと言い切ることはできない。

もう一点。「段く」とあるところは、おそらく「段へ」であろうと思われる。繰り返し記号としての「へ」が小さく「く」と記されているのである。